

SHOW-HOMEシネマフルーツ

★★★★★

ナポレオン

2023年／アメリカ・イギリス映画

配給：ソニー・ピクチャーズエンタテインメント／158分

2023（令和5）年12月2日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

2023-143

監督・プロデューサー：リドリー・スコット
脚本：デヴィッド・スカルペ
出演：ホアキン・フェニックス／ヴァンセッサ・カービー／タハーム・ラヒム／マーク・ボナード／パート・エヴェレット／ユーセフ・カーコア／ポール・リス／ベン・マイルズ／リュディヴィーヌ・サンエ／エドウアル・フィリボナ／ジョン・ホーリングワース

みどころ

ナポレオンはシーザーやアレキサンダーと並ぶ天下の英雄！それが大方の評価だが、その実態は悪魔？そしてまた、愛妻ジョゼフィーヌとの関係で見れば、稀に見るマザコン男・・・？

巨匠リドリー・スコットが描くナポレオンの姿を、そんな視点からしっかりと検証したい。そのためには、コッポラ版『ナポレオン』（81年）と、ハリウッド版『戦争と平和』（56年）、ロシア版『戦争と平和』（65～67年）との比較対照も不可欠だ。とりわけ、①アウステルリツの戦い（1805年）、②モスクワ遠征（1812年）、③ワーテルローの戦い（1815年）を巡っては、その実態をしつかり学習し検証したい。

ナポレオンの皇帝就任を聞いたベートーヴェンは、ナポレオンへの献辞を記した最初のページを破り捨ててしまったが、フランス革命後の混乱を、卓抜した軍事力と外交力によって、ヨーロッパ大陸を支配する超大国にまで高めたナポレオンの軍人としての功績は如何に？また、ナポレオン法典を制定した、政治家としての功績は如何に？

こりや面白い！ナポレオンは坂本龍馬と並んで「偉人伝」の中でもメチャ面白い人物（偉人）だから、本作の鑑賞を契機として、しつかりその人物像と歴史の実態を多方面から学習したい。

———— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■□■コッポラ版はイタリア越えまで！本作はフランス革命から！■□■

「ナポレオン」と聞けば、小学生時代に偉人伝を山ほど読んだ私は、それだけで血湧き肉躍る気分になってくる。1769年生まれのナポレオンは、1779年にブリエンヌ陸軍幼年学校に、1784年にパリの陸軍士官学校の砲兵科に入学。士官学校卒業試験の成績は58人

中42位だったものの、通常の在籍が4年前後であるところ、わずか11ヶ月で必要な全課程を修了したナポレオンは開校以来、最短で卒業し、16歳で砲兵士官として任官。そして、20歳を迎えた1789年にフランス革命が勃発した。しかし、本作はギロチンの露と消えるマリー・アントワネット（キャサリン・ウォーカー）の姿を、群衆の1人として冷ややかに見つめるナポレオン（ホアキン・フェニックス）の姿から始まる。

幼年学校時代のナポレオンが、クラスで雪合戦をした時に見せた見事な指揮と陣地構築は有名な逸話だが、そんな若かりし日のナポレオンの活躍から始まり、1796～1797年の「イタリア越え」までを描いた、コッポラ版『ナポレオン』（81年）をあなたは知ってる？これは、もともとはフランスのアベル・ガス監督が、D・W・グリフィスの『国民の創生』（1915年）の影響を受けてつくった1927年の歴史大作だ。当初はナポレオンの全生涯を描く全6部作として企画されたが、資金不足もあって、イタリア征服までの第1部のみが映画化された。同作は、サイレント末期のモンタージュ技法を駆使した迫力ある画面構成であるうえ、最後の約20分間は「トリプル・エクラン」と命名された3面スクリーンを使った画期的なもので、1927年にパリのオペラ座で、アルチュール・オネゲルの音楽により、4時間10分のバージョンが初公開された。しかし、映画がトーキー時代に突入する中、無声映画による「トリプル・エクラン」のような大スクリーン方式への投資は敬遠されたため、同作はほとんど完全な形で上映されることなく、アメリカでは上映時間5時間のこの巨編が1時間20分に短縮され、スタンダード版に焼き直されて公開されたそうだ。また、日本でも17.5ミリ版が公開されたにすぎず、興行的には惨敗したらしい。

しかし、その後、1935年の音声バージョンなど、複数のバージョンがつくられたらしい。そして、1980年にイギリスの映画史家ケヴィン・ブラウンローが5時間近いバージョンを復元し、フランシス・F・コッポラが再編集した後、父カーマイン・コッポラ作曲による音楽を生演奏でつけてニューヨークほか各地で上映した。このコッポラ版は、日本でも1982年に上映され、大阪でも同年、中之島フェスティバルホールで上映された。私はその貴重なチケットを購入し、大感激の中で同作を鑑賞したことを、今でもハッキリ覚えている。

■リドリー・スコット監督は、なぜナポレオンを映画に？■

本作のチラシには「英雄と呼ばれる一方で、悪魔と恐れられた男」と書かれ、パンフレットのイントロダクションには、「歴史に名を残す皇帝・ナポレオンは、気高い〈英雄〉か、恐るべき〈悪魔〉か？」と書かれている。したがって、本作を監督した巨匠、リドリー・スコットの問題意識がそこにあったことは明らかだが、なぜナポレオンは英雄と呼ばれる一方で悪魔と恐れられたの？それは、本作ラストの字幕で表示される、さまざまな戦いで戦死者の数を見れば明らかだ。

しかし、パンフレットにある、リドリー・スコット監督／プロデューサーのインタビューを読むと、「私が映画監督として惹かれたのは彼の人物像であり、それが歴史を超えて心の中に入ってくることなのです。」と書かれている。去る11月23日に観た『JFK／新証言

知られざる陰謀【劇場版】』(21年)を監督したオリヴァー・ストーン監督は、『JFK』(91年)以降、切れ味鋭い社会問題提起作を次々と世に送り出してきたが、リドリー・スクット監督は一方では『グラディエーター』(00年)をはじめとする「歴史もの」を、他方では、『オデッセイ』(15年)『シネマ37』34頁)や、『ブレードランナー2049』(17年)『シネマ41』未掲載)、『ゲティ家の身代金』(17年)『シネマ42』172頁)、『ハウス・オブ・グッチ』(21年)『シネマ50』41頁)等の娯楽大作を世に送り出してきた。

そんなリドリー・スクット監督は、上述のインタビューの中で「人々が今でもナポレオンに魅了される理由の一つは、彼がとても複雑な人物だったからだと思います。」と述べている。続けて、彼は、ナポレオンとジョゼフィーヌの関係性について、「ナポレオンはすり泣く羽目になります。私たちが知る、ヨーロッパの王座へと突き進む男、あるいは戦術の天才がちっぽけで無力な男になるのです。」等と2人の関係について詳しく語っている。それらの言葉からわかるように、本作はメインとなるさまざまな戦闘シーンと共に、「ナポレオンとジョゼフィーヌとの関係性」をもう1つの大きなテーマとしてナポレオンの人物像に迫っているので、それに注目！

■□■なぜ、ナポレオン軍は強かったの？■□■

先の大戦(=太平洋戦争)において日本はアメリカに敗れたが、その最大の理由は工業生産力の差だ。第一次世界大戦において、既に戦争は個々の戦闘の勝敗ではなく、国を挙げての総力戦=工業生産力の優劣であることが示されていたが、第二次世界大戦ではそれが地球的規模で明らかになった。しかし、東西冷戦後に起きたベトナム戦争や現在のイスラエルvsハマス抗争を見ていると、今や戦争の中心はゲリラ戦に移行している感が強い。

他方、日本の戦国時代、上洛を目指す大名の中で最強の軍団は武田の騎馬軍団だったが、その“神話”を一気に破っていたのが、当時、南蛮から入ってきた銃に目をつけた織田信長だった。南蛮銃の登場によって、それまでの武士たちの戦いはスタイルを一変させざるを得なくなったわけだ。また、幕末から明治維新に至るさまざまな戦いにおいても、戦いは西欧式の近代的な軍隊同士の戦いに変化していった。

なぜここでそんなことを書くのかというと、私の頭の中に、なぜナポレオンの軍隊は強かったのか？という問題意識があるからだ。私は小学生の時に「偉人伝」を片っ端から読んだ。とりわけ、ナポレオンに関する偉人伝はたくさん読んだ。そこで私がたどり着いた、「なぜナポレオン軍は強かったのか？」の回答は、彼が数学(幾何)の天才だったため、そして、そのため彼は大砲の活用法が天才的だったためだ。フランス革命は1789年に起きたが、その当時の軍隊の指揮命令系統のあり方は？銃の活用は？そして大砲の活用は？

銃は1人の人間で自由に操作できるが、大砲は大きく重いから移動が大変。しかも、弾がなければ無用の長物だし、弾を目標に命中させるためには数学(幾何)の知識が不可欠だ。しかして、ナポレオンは国費で入学したブリエンヌ陸軍幼年学校では、数学で抜群の成績を修めたそうだ。ちなみに、『アルキメデスの大戦』(19年)『シネマ45』78頁)で

は、菅田将暉演じる、ある事情によって東京帝大を退学させられた、100 年に 1 人という数学の天才が、館ひろし演じる山本五十六の懇願を受けて、“巨大戦艦派”（“艦隊決戦派”）が計画中の巨大戦艦の見積額のインチキ性を暴くという大役を果たしていたが、ナポレオンは陸軍士官学校で最も人気の高い騎兵科を選ばず、砲兵科を選んだことと、持ち前の数学の才能によって、ナポレオン独自の大砲を用いた戦術を確立させたわけだ。彼のその能力は、1793 年のトゥーロンの戦いでも、そして、1805 年のアウェス・テルリッツの戦いでも最大限発揮されているので、それに注目！

■■ナポレオンは意外にもマザコン？色を好みない英雄も？■■

私は「英雄色を好む」は古今東西の常識だと思っていた。シーザーとクレオパトラの例、玄宗皇帝と楊貴妃の例、さらに項羽と虞美人の例（霸王別姫）等をみても、それは明らかだ。また、秀吉は子供に恵まれなかったが、信長も家康も側室が多く、子供も多かった。

それらに対して、本作を観ていると、ナポレオンはジョゼフィーヌ（ヴァネッサ・カービー）一筋だったことがよくわかるが、それは一体なぜ？そもそも、ナポレオンが一目惚れした（？）女性、ジョゼフィーヌは 6 歳も年上で、しかも前夫との間の 2 人の子持ちだったから、最初からナポレオンとは不釣り合いなことは明らかだ。ちなみに、「世界三大悪妻」は、①ソクラテスの妻、クサンティッペ、②モーツアルトの妻、コンスタンツエ、そして、③トルストイの妻、ソフィア・アンドレエヴナだが、③のソフィアに代わって、ジョゼフィーヌを挙げることもあるから、そんな女と結婚したナポレオンは、よほど不幸な男！もっとも、世間はそう思っても、ナポレオン本人は、自分がエジプト遠征に赴いている最中に若い男と浮気するようなジョゼフィーヌに対して“三行半”を下すこともできず、本作のスクリーン上で見るようなベタベタぶり（醜態？）をさらしていたらしい。本作では、戦場にあっても常にジョゼフィーヌにラブレターを書き続けるナポレオンの姿が描かれるので、それに注目！これを見ていると、ナポレオンはかなりのマザコン男！？そう思わずるを得ないが、さてその実態は？

そんなナポレオンだから、いわゆる“側室”はいなかつたらしい。その結果、せっかく皇帝の座についても後継者（=子供）に恵まれなかつたため、やむを得ずジョゼフィーヌと離婚し、オーストリアのハプスブルク家皇女マリー・ルイーズ（アンナ・モーン）と結婚し、やっと男子を授かることになったが、その頃のナポレオンは既に絶頂期を過ぎて退潮期に・・・。

■■ナポレオンはなぜ皇帝に？第一帝政と大陸支配は？■■

ナポレオンは 1804 年 12 月 2 日、戴冠式をパリのノートルダム大聖堂で挙行した。戴冠式をローマではなくパリで挙行したこと、また、本来ローマ教皇から授かるべき帝冠をナポレオンは自ら戴いたこと等において、ナポレオンの皇帝就任と第一帝政の開始については賛否両論がある。つまり、この時点で、ナポレオンはフランス革命の延長上にある英雄か、それとも権力欲に取り憑かれた俗物か、という論点が急浮上するわけだ。

ナポレオンの1歳年下だったベートーヴェンは、ナポレオンを革命の理念である自由と平等を実現する英雄であると考え、彼を賛美する交響曲第三番の作曲を進めていたが、ウイーンでナポレオンの皇帝即位のニュースを聞くと、ナポレオンへの献辞を記した最初のページを破り捨てた、という逸話は有名だ。皇帝に就任したナポレオンによる大陸制覇を恐れたイギリスとナポレオンとの対立が激化したのは当然で、その結果、1805年10月21日にトラファルガーの海戦が起きたが、その勝敗は？そしてまた、ナポレオンの大陸支配の野望の達成は？それらの歴史上重要な事項をしっかりと勉強したうえで、リドリー・スコット監督がそれらを本作でどのように描いているかをしっかりと味わいたい。

■口■婚姻外交（政略結婚）に注目！その規模はすごい！■口■

家康に諸大名の前で“臣下の礼”を取ってもらうために、秀吉がまず妹の朝日姫を妻として差し出し、続いて母親の大政所を人質に差し出したことは、NHK大河ドラマ等に再三登場する有名な逸話だ。また、斎藤道三の娘・濃姫と織田信長との結婚が露骨な“政略結婚”だったことも有名な逸話だ。このように、日本の戦国時代では婚姻外交（政略結婚）は諸代名の常識だったが、それは中国の春秋戦国時代も同じ。そして、それはまた、ナポレオンの時代も同じだった。

ナポレオンが妻のジョゼフィーヌとの間で子供に恵まれなかつたのは不幸だったが、ヨルシカ生まれのナポレオンの兄弟姉妹はたくさんいたし、ジョゼフィーヌには連れ子もいたから、皇帝に就いたナポレオンは、一方で大規模な戦争を展開しつつ、他方でヨーロッパ各国と大規模な婚姻外交（政略結婚）を展開した。絶頂期のナポレオンの勢力は、ウィキペディアによれば、「イギリスとスウェーデンを除くヨーロッパ全土を制圧し、イタリア、ドイツ西南部諸国、ポーランドはフランス帝国の属国に、ドイツ系の残る二大国のオーストリアとプロイセンも従属的な同盟国となった。」とされている。また、ナポレオンは各地に自分の親族を国王として配置した。その例を挙げると、①兄のジョゼフをナポリ国王とした後、スペイン国王に、②二番目の弟のルイをオランダ国王に、③三番目の弟のジェロームをドイツ西部のウェストファリア国王に、④妹のエリザをイタリア中部のトスカナ大公妃に、⑤三番目の妹カロリーヌの夫ミュラ元帥をベルク大公に、その後はナポリ国王に、等だから、その規模はすごいものだ。

■口■ナポレオン法典の制定は政治家としての素晴らしい功績■口■

そんなナポレオンは“英雄”というよりは、むしろ“征服者”という顔がふさわしいが、忘れてはならないのは、彼が1804年に“ナポレオン法典”と呼ばれるフランス民法典を公布したことだ。これは、フランス革命の理念を法的に確定させたものだと言われている。

ウィキペディアによれば、「これは各地に残っていた種々の慣習法、封建法を統一した初の本格的な民法典で、「万人の法の前の平等」「国家の世俗性」「信教の自由」「経済活動の自由」などの近代的な価値観を取り入れた画期的なものであった。」と解説されている。また、ウェブサイト世界史の窓には「第一統領ナポレオンのもとに、四名の起草委員会を設

け、彼自身も参加して審議された。彼は古代の東ローマ皇帝ユスティニアヌスの『ローマ法大全』を貧乏少尉のころ読破しており、その章句を引用して委員を驚かしたという。1800年8月から審議、1803年から1章ずつ議決し、1804年3月に36章の公布を終了した。初め「民法典」といわれ、後1852年に「ナポレオン法典」となった。「所有権を中心とする封建的秩序に対するブルジョアジーの勝利を確定させたところにその意義がある。土地の質権、抵当権を承認、均等分割相続を規定している一方、家族を尊重、家長の位置を高めている。その他、法の前の平等、国家の世俗性、信仰の自由、労働の自由など、革命の遺産を固定させる内容を含んでいた。この理念はナポレオンの征服戦争と共に、ヨーロッパに拡大される。」と書かれている。

多くの人は知らないだろうが、ナポレオン法典の整備は政治家ナポレオンの素晴らしい功績であることをしっかりと認識したい。

■□比較の妙① アウステルリツツの戦い■□■

ナポレオンをテーマにした映画や小説が多い。前述したコッポラ版『ナポレオン』は映画の代表だが、世界文学全集のトップに挙げられるトルストイの名作『戦争と平和』でも、ナポレオンは重要な登場人物とされており、ストーリーの核心を成している。それは第1に、ナポレオンを英雄だと信じていた主人公の1人、ピエールが、モスクワ入城をしてくる彼の姿を見て、その価値観を180度転換すること。第2は、もう1人の主人公であるロシア軍将校のアンドレイがアウステルリツツの戦いでナポレオン軍と撃突し、名誉の負傷を負ってしまうこと。そして第3は、モスクワ入城を果たしたにもかかわらず降伏していないロシアの“戦術”にナポレオンが激怒するものの、結局、冬将軍の前に惨めな敗北を喫することだ。しかし、ハリウッド版もロシア版も、映画『戦争と平和』では、アウステルリツツの戦いをいかに描いていたのか？

1805年12月に起きたアウステルリツツの戦いは、フランス軍がロシア・オーストリア連合軍を破った戦い。そして、フランス皇帝ナポレオン1世、オーストリア皇帝フランツ1世、ロシア皇帝アレクサンドル1世の3人の皇帝が参加したことから「三帝会戦」と呼ばれているものだ。日本で1600年に起きた関ヶ原の戦いは、東西を二分した、まさに“天下分け目の大会戦”だったが、ハリウッド版およびロシア版の映画に見るアウステルリツツの戦いは、それ以上のものだった。そのアウステルリツツの戦いを、リドリー・スクット監督は本作でどのように描いたの？

2022年2月24日から始まったウクライナ戦争は今、2度目の冬を迎えて膠着状態に入ろうとしているが、アウステルリツツの戦いも12月だったから、寒かつたはず。すると、緑豊かな大草原の中で歩兵、騎兵そして砲兵が激突していたハリウッド版、ロシア版の映画の描写は真っ赤なウソ？そして、氷の上に集結するロシア軍を大砲の集中砲火で完膚なきまでに打ちのめす、本作に見るアウステルリツツの戦いが本当の姿・・・？

■□■比較の妙② モスクワ入城の結末は？冬将軍の到来は？■□■

私はハリウッド版（＝オードリー・ヘップバーン版）『戦争と平和』（56年）を中学生の時に数回観たが、今なお鮮明に覚えているシーンがたくさんある。その1つが、モスクワに入城したナポレオンが大広間を歩き回りながら、ロシアからの降伏の使者を待っているシーンだ。この時のナポレオンが大いに苛立っていたことは明らかだが、いつまで待っても使者はやってこなかったからアレレ・・・。これはつまり、ロシア軍を指揮するクトゥーゾフ将軍は連戦連敗で逃走ばかりだったものの、実はこれが冬将軍の到来を見越しての戦略だったわけだ。

そのため、ナポレオンは引き続き東に向かってロシア軍を追撃するのか、それとも冬将軍を避けてフランスに退却するのかの決断を迫られたが、その間も、モスクワの街にはあちこちで火事（火付け）が発生したから、弱り目にたたり目だ。いくら火付けの犯人を逮捕し銃殺しても火事は一向に収まらないまま、遂にナポレオンはフランスに向けての撤兵を決断したが、攻め入る時と違い、敗残兵の帰路は惨めなものだった。ハリウッド版『戦争と平和』では、雪の中を逃げていくフランス兵を、ロシア軍が思うがままに追撃するシーンが描かれていたが、それも私はハッキリ覚えている。

ナポレオンによる、そんなロシア遠征と、その敗北のサマを、リドリー・スコット監督が本作でどのように描くの？それは、『戦争と平和』と比較しながら、あなた自身の目でしっかりと確認してもらいたい。

■□■比較の妙③ ワーテルローの戦いで敗けぶりに注目！■□■

関ヶ原の戦いは、西軍の一方の将として松尾山に陣取っていた小早川秀秋の裏切りによって一気に東軍有利となり、石田三成率いる西軍は敗北した。1600年の関ヶ原の戦いは、石田三成が五大老の一人である会津の上杉景勝（具体的には家老の直江兼続）と結んで、五大老の一人でありながら、豊臣政権の乗っ取りを狙う徳川家康の打倒を目指した「天下分け目の戦い」だった。それに対して、1815年6月18日のワーテルローの戦いは、エルバ島から脱出してパリに入り、ルイ18世を追放して再び帝位に就いたナポレオンが再び将兵を集め、その“復活ぶり”を世に知らしめるために、イギリス・プロイセン連合軍と戦ったものだ。

イギリス海軍の強さは1805年のトラファルガーの海戦で実証されていたが、映画『ワーテルロー』（70年）を観れば、ウェリントン公アーサー・ウェルズリー率いるイギリス陸軍の強さにも納得できる。当然、兵員の数は連合軍が勝っていたが、己の戦術に自信を持つナポレオンは、連合軍を各個に撃破することにより勝利することができると確信していたらしい。ところが、全盛期を過ぎたナポレオンの周りには優れた将軍が少なかったこともあり、結果的にナポレオンは完敗！その戦いの全貌とナポレオンの敗因は、映画『ワーテルロー』を観ればよくわかるが、この敗北によって、せっかく実現したナポレオンの天下は「百日天下」で幕を閉じることに。

2023（令和5）年12月6日記